



非認知能力向上事業～低学年での演劇ワークショップの一コマから～

- ◆モデル校での3年目の実施となる非認知能力向上事業がスタートしました。

演劇ワークショップを昨年、一昨年経験している、小学校2年生、3年生の子どもたちは、大きな成長ぶりを見せていました。

- ◆「ひらがなかカタカナ3文字以内でそれが分かるように表してみよう」とお題が提案されました。

すぐに話し合い、練習をするグループの中に、1つだけ動きがゆっくりのグループがありました。ずっと座ったままで、話し合いも活発になったり停滞したりしていました。

発表まであと3分です。みんなの前で発表しなければなりません。さて、皆さんならこのグループにどう関わりますか？



【↑本文とは関係ありません】

A 「こうしてみたら？」とアイデアを教え、配役も指名し、練習させ、発表に間に合うように介入する。

B 「どんな感じ？」と声をかけ、アイデアのヒントを与えて活動を促し、何とか形にして、発表に間に合わせる。

C 話し合いや練習がどんな進捗状況か、近くから観察し、発表間近でも、関与しない。

- ◆このグループは発表の時、釣りをしている人間の足元で、小さな魚が中くらいの魚に食べられ、中くらいの魚が大きな生き物に食べられるシーンを見事に表現しました。演じ終わったとたん、拍手喝采でした。「つり」「さかな」「いきる」「いのち」などいろんな答えが出ましたが、なかなか当たりません。そして最後に「しぜん！」と当ててもらった瞬間、演じた5人の子どもたちは両手で大きな丸を作り、飛び上がって喜びを表していました。

- ◆指導者のわたなべなおさんは、次のようにコメントしています。

『「しぜん」を発表した班には、講師は意識的に手を出さないようにして見守りました。講師や友達に頼らず、自分達だけでやれるかがポイントでした。たとえ失敗しても学びにつながるから大丈夫だと強く思っていました。あんなに素晴らしい作品を創り上げてくれて本当にうれしかったです。リーダーシップをとる人がいない中で、あきらめず、粘り強く向き合い、かなり時間がかかりましたが、それまでのやり取りも決して無駄ではなく、お互いを知ることややりたいことのイメージを共有する価値ある時間だったと思います。非認知能力を高めるには、どれだけ自分たちでやるかがポイントで、大人は手助けしないというメッセージです。指導者が積極的に関わって、うまく見せかけることはたやすいことです。でも本当にそれでいいのかと思います。演劇ワークショップの良さはトライ&エラーです。何度でもやり直せることに意味があります。』

演劇ワークショップはこの後も続きます。子どもたちの変容が楽しみです。